

えんま様

山桑を歩く

この夏、「地獄・極楽」をテーマにした展覧会を見る機会がありました。人間が亡くなる直前、極楽浄土に迎えるため阿弥陀如来が現れる様子を描いた「来迎図」や、死後裁きにあう様子の「地獄図」など千年ほど前から描かれた絵図や仏像が展示されました。

その中に「閻魔王」があり、「うそをつく」と、えんま様に舌を抜かれる」という話を耳にしたことがあると思います。その様子が地獄絵に描かれています。

地獄の王である閻魔王の木像は、市内の寺院でも何体か



匠瑳地区山桑にある閻魔王石像。厳しい裁きを言い渡しているかのような顔つき

まつられています。今回紹介するのは石像のものです。

市営山桑野球場の近くに医光院があり、県道を隔てた集落入り口のそばの墓地に「えんま様」がまつられています。

像の高さは77cmほどですが、台石に乗り、右手に持つ笏は欠けるものの冠を付けた、いかめしい顔に、目をつり上げ口を開いた一般的に見られる閻魔王の姿です。背面に刻まれた文字から、300年ほど前の1716(正徳6)年3月に山桑村の男女の集まりである「念仏講中」によってまつられたことが分かります。

まつられた頃には、正月と7月の16日が「地獄の釜もあく、えんま様の縁日」と信じられていたので、人びどのお参りを願ったのかも知れませぬ。

石像のえんま様はもう1体、東小笹区(共興地区)の廃寺・薬王院跡の共同墓地にあります。高さ58cmほどで、山桑の像と比べると小ぶりですが、東小笹村の佐藤伊兵衛が1797(寛政9)年8月にまつり、由緒が刻まれています。伊兵衛は1763(宝暦13)年6月に父・三郎兵衛に頼まれ木像の閻魔王をまつりましたが、破損したので再建したとあります。

2体の石像・閻魔王を紹介しましたが、人は死後、冥界(死後の世界)の裁判官である10人の王(十王)の裁きを受けるといいます。それぞれの王を描いた図が「十王図」で、10幅そろったものが米倉区(中央地区)の西光寺に伝わり、県の文化財に指定されていますが、紹介は別の機会にします。

(市文化財審議会委員・

依知川雅一)

閻秘書課広報広聴班

☎73・0080